

学校を「キレイ」にするのも
「良く」するのも「君たち」です！



苗植えボランティアに参加した生徒

「ひと肌脱げる」生徒に・・・

「ひと肌脱ぐ」を辞書で調べると、「少し暑さを脱いで、手助け、支援力を割いて、と書いてある。まさに本校の教育目標である「自立の貢献」の「貢献」にある。本校では、今年度は特にこの部分で力をいれます。先日も部活動が開始される前の週に、昼休みに「校庭の草抜き」を募集しました。二日間の実施に、約百名近くの生徒が参加し、草抜きに花壇の苗植えも行われた。また、十六日に行われた「花壇の苗植え」にも、約三十名の生徒が参加し、学校花壇にきれいな苗を植えてくれました。苗植えボランティアに参加した生徒



昼休みの草抜きボランティア

このように「ひと肌脱げる」生徒が増えていくことで、玉中はどんどんきれいになっていきます。学校を「キレイ」にするのも「君たち」の行動なんです。「受け身」でいては何も変わりません。進んで「行動」に移しましょう。

「ひと肌脱ぐ」光景がた
くさん

他にも学校が再開される「ひと肌脱ぐ」光景がたくさん見られます。例えば、自転車置き場で倒れてしまった自転車を立て直して、一年生や二年生が手伝って荷物を運んであげたり、給食の配膳の際に、「何か手伝えることありませんか？」と手伝いに来る生徒がいたり、毎朝、早く登校し学年の教室の窓を全部開けてくれたりと、「ひと肌脱げる」生徒が増えていきます。

雨の中を 八十六名が自転車 で登校

梅雨に入り、雨の降る日が多くなります。先週の金曜日、学校が再開されたから初めて「雨」の中での登校という経験をした生徒がいました。どのくらい自転車がカッパを着て登校するのかわからないと、門のところで見てみると、十人の生徒（全校生徒の約三分の一）が自転車で登校します。金曜日は雨の降る中、生徒がカッパを着て登校する姿を見ることができました。雨の中、生徒がカッパを着て登校する姿を見ることができました。



雨の中自転車での登校

とてもたくましくみえました。本校の教育目標である「自立貢献」は自分の力で登校することです。雨が降る厳しい条件の中でも自分の力で登校すること



自転車置き場は白いカッパがきれいです

で、困難なことにも立ち向かっていく力が身に付いてくはずです。さらにカッパを着て登校してきた一年生が、三年生の姿をみて、カッパのたたみ方や自転車の置き方を工夫している姿が印象的でした。

県総体の中止に伴う代替え大会 七月下旬に実施！

新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、今年度の県総体とその予選を兼ねる県東地区総体が中止になりました。三年生にとっては三年間の部活動の集大成となるはずだった総体が中止になる



ったことで、目標を失い、練習へのモチベーションも下がってしまった人もいたのではないかと思います。三年生には何かしら活動の思い出を促すことが大切だと思います。そこで、県東地区全体での代替え大会は、新型コロナウイルスへの安全確保が困難であることから実施しないことになりました。各単位での開催という事になりました。七月の下旬に実施し、市内の中学校との合同で

流試合を予定していましたが、詳しい日程等については、決定次第、各部活動顧問から連絡させていただきます。三年生にとっては最後の大会になりますが、約一ヶ月の練習期間で、最高の状態で大会を迎え、仲間との思い出をたくさんつくって欲しいと思います。また、一・二年生には三年生の取り組み姿を見せ、新たな玉中の部活動の文化を残して下さい。

編集後記 「本を読む」

先日、本校のある女生徒と話す機会があった。その生徒は本を読むのが好きで、ちょっとした時間があれば本を読んでいるというのであった。確かに、次の日にまた彼女と話すと、すでに昨日読んでいた本と違う本になっていた。「きのうのは？」と聞くと、「もう読んでしまいました。」というのであった。昨日見たときは、確かしおりが前半に挟んであったので、一日のうちに全部読んでしまったことになる。

今、県内の学校では読書活動に力を入れている学校も多々ある。なぜ読書なのだろうか？いろいろな考えがあるだろう。自分なりに思うことは、中学生の時期は、大人への身体をつくるために十分な栄養をとることが必要ときだ。それと同じで、大人に向かって「豊かな心」を育てるためにも栄養が必要だ。何もなくても「こころ」は育たない。その「こころ」を育てる栄養分になるのが「本」なのだと思う。この世界も広がる。だから中学生のこの時期にたくさん本を読むことが必要なのだと思う。自分を振り返ると、中二の時に読んだ壺井栄さんの「潮」が、分教場の子どもと新任の先生の先生との心温まるふれあいの命を変えた第二次大戦。この本を読んだ、今の仕事に就くというきっかけをつくってくれた。中学生の時に会った本が、もしかしらなければ、今の人生を変えることになるかもしれない。（文責：小野口 吉政）